



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自立を通じた親子関係の変化と繋がり再検討：関係の中に生きる者が自立を目指すことの意味とは [全文の要約]
Author(s)	濤岡, 優
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16316号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95450
Type	doctoral thesis
File Information	NAMIOKA_Yu_summary.pdf



博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：濤岡 優

学位論文題名

自立を通じた親子関係の変化と繋がり の再検討 ：関係の中に生きる者が自立を目指すことの意味とは

本論文は、関係の観点からの自立の再考を目指して、従来の個体としての成熟を前提とした自立の意味ではなく、関係の中に生きることを前提とした自立の意味とは何か、という問いに迫ることを試みたものである。そのために、人が最初に得る他者との繋がりであり、かつ生涯にわたって経験し続ける繋がりとしての親子関係に焦点をあて、子と親の両方の視点から、それぞれの立場や親子関係の経験について検討した。

本論文は、序章、第1・2章：文献レビュー、第3章：本研究の目的と方法、第4～10章：本研究が設定した3つの課題の検討、第11章：結論、終章から成る。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、発達心理学領域の先行研究における、自立に関する知見を整理・検討した。そこで明らかになったのは、従来の研究では、青年期の発達課題として、特に心理的自立を果たす必要が指摘されること、またその達成は、個人として成熟した状態によって説明されていることだった。すなわち、従来の自立観の前提にある、個人単位での発達理解が指摘された。

さらに、この自立を親子関係の文脈で検討した先行研究では、自立の達成には親からの分離を不可欠とするものが多いこと、一方、近年の研究では、関係の分離ではなく、関係の再構成という視点から検討されていること、すなわち、関係の断絶によって果たされる自立から、関係の中で果たされる自立への、自立理解の転換が指摘された。しかし依然として、親とは異なる個人としての成熟や人格の確立が目指され、さらに、それらの研究では、親子関係の再構成過程を検討しているようでありながら、実際には親と子とその関係的枠組みから出て、個人対個人の関係に変化する過程が提示されており、自立や再構成過程の説明の仕方に矛盾があると考えられた。

第2章では、この矛盾を乗り越え、関係を軸に人のあり方やその変化を問うための方法的アプローチを明示した。具体的には、他者との関わりの中で経験される発達理解を試みたErikson (1964/2016) の〈相互性〉の概念を参照し、検討の単位を個人ではなく関係とすること、さらに、その関係を単なる「個人対個人」ではなく、「子と親」というような、差異を持った立場のまま、その立場での経験を問う、という本研究の検討の枠組みを明確化した。

第3章では、親子関係を検討の対象とするにあたり、特に先行研究でその関係の特徴としてあげられている、関係の「選択不可能性」、すなわち子の立場での親子関係の選べなさと、祖父母世代、親世代、子世代というような、親子の「世代的繋がり」の経験を改めて問い直す必要性を指摘した。そのうえで、本研究全体の問いである「関係の中に生きる者にと

っての自立の意味とはなにか」に対する結論を導き出すために、本研究では、青年期における自立の経験、親子という繋がりを経験、さらに親子の世代的繋がりを経験、という3つの経験を問い直すことを、課題として設定した。

加えて、課題の検討を進めるために用いる方法について明記した。具体的には、本研究が問い直しを試みる現象を経験する者自身が、どのようにその経験を意味づけているのか、その意味づけに迫るために、質的な手法を用いることとした。特に、本研究ではライフヒストリー研究の枠組みを参照した。なぜなら、ライフヒストリー研究は、語られた出来事や言葉を切片化し、それぞれの意味を独立的に検討するのではなく、「生活」という1つのまとまりの中で、人の生きてきた歴史とその意味づけの理解を目指す手法であり、経験する者の内側の視点を介してその経験や意味づけにアプローチすることを目指す本研究に適切な手法と考えられたからである。

各課題の検討、およびそこで得られた結果と考察は以下の通りである。

まず課題1の検討を試みた第4・5章では、従来の先行研究で、子が自立する時期とされてきた青年期に焦点をあて、子と親それぞれの経験を検討した。具体的に、第4章では、子の立場に焦点をあて、その立場で経験される親子関係の再構成過程や、子としてのあり方の理解を試みた。その結果、3つのことが理解された。1つは、先行研究ですでに指摘される親子関係の再構成過程が経験されていること、特に自立を果たしたあとの親子関係のあり方として、親と子が互いに支え合い協力し合う対等な関係が本研究においても理解された。一方で本研究では、その対等さの背後に、親子として共有してきた時間の存在が指摘された。つまり、青年期の自立を通して経験される親子関係は、単に横並びの対等な関係として理解されるものではなく、子の立場をもつ者として経験してきた歴史を伴う対等さであることが理解された。2つは、親子関係が再構成されるに伴い、子としてのあり方も変化していることが理解された。すなわち、これまで自明であるがゆえに意識されることのなかった子としての立場を自覚し、そのうえでその立場を改めて引き受け直し親と関わっていく、というような親の子になり直す変化、いわば「受動的な子としてのあり方から能動的な子としてのあり方への変化」が理解された。本研究ではこの変化の過程を「子としての自己の再構成過程」とした。

続く第5章では、母親の立場での子離れの経験に焦点を当て、子離れがどのようなものとして意味づけられ、経験されているのかを検討した。その結果、以下の2つが理解された。1つは、そもそも子離れの経験は、子との関係を手放すことではなく、自ら担ってきた子育ての意味を子の人生に委ね、また委ね続けていく経験、すなわち「親の人生から子の人生へ子育ての意味を委ねること」として経験されていることが理解された。2つは、子離れを経験した後も親であり続けていること、しかし単に親であり続けるだけではなく、親としてのあり方の質的な変化を伴っていることが理解された。このことから、親であることもまた、子の自立によって途切れるものではなく、継続しながらそのあり方を変容させていること、すなわち、「親であり続け親になり続ける過程」が理解された。

以上をまとめると、課題1として自立の経験を問い直した結果、従来の先行研究が提示してきた「子から子ではない者へ」というような個人としての変化過程としてではなく、子の側では「子であり続け子になり直す過程」、また親の側では「親であり続け親になり続ける過程」として見る視点が得られた。

第6章では、第4・5章で得られた示唆から、変化と同時に経験されている「不変の相」に視点を向けることの重要性かつ不可欠性を指摘した。すなわち、子になり直す、また親になり続けるという自己のあり方の変化は、その根底に子であり親であり続けるという不変性をもつ経験である、ということである。したがって、関係の中に生きる者としてのあり方を問うためには、まず「不変の相」を関係の中に定めること、つまり、どの関係に組み込まれた誰と対峙して生きる者なのか、という関係の枠組みとそこでの立場を崩さないままに検討する観点が不可欠であるとした。以上をふまえて、本章ではこの「不変の相」を見る視点を強調するために、変化の相と不変の相の両方が経験される繋がりとしての親子関係を「対の関係」とした。

続く第7、8章では、2つめの課題、すなわち親子という繋がりへの問い直しを試みた。そのために、本研究では、親子としての繋がりを前提にすることが困難な者の経験に焦点をあてた。なぜなら、親子としての繋がりが自明ではない場合、その繋がりの意味や、子／親としての立場が、より強く意識されると考えたからである。したがって、親子の繋がりを当たり前前に享受できる者ではなく、繋がりの自明性そのものが揺らぐ者にとっての親子関係の経験を理解するために、第7章では、子の立場として、親からの被虐待経験をもつ者、また第8章では、親の立場として、子育てに関われなかった経験をもつ者の経験に焦点をあてた。

その結果、子の立場の検討では、3つのことが理解された。1つは、従来の先行研究で提起される、親密な関係を前提とした親子関係の再構成過程ではなく、親と離れることを必要とし続ける関係のあり方が理解された。一方で、それは親子関係の断絶を意味しないこと、むしろ、離れることは関係を維持するための関わり方であり、さらに離れながらも、自分はその親から生まれ育てられた、という事実の否定できなさに向き合い続けていることが理解された。2つは、子にとっての親が、自らの存在の「はじまりの地点」を共有する存在であり、したがって切り離すことのできない存在、さらにいえば単なる他者とは区別される、「存在的次元」で繋がる存在として経験されていることが理解された。3つは、第4章で示したような受動・能動という明確な区切りをもつ態によって説明され得ない「子としての自己」のあり方が理解された。すなわち、親という他者の存在によって自らの存在があるという否定できない事実としての「存在の受動性」と向き合い続ける、という「子としての自己」のあり方が理解された。

一方、第8章で取り上げた、子育てに関われなかった者の経験からは、3つのことが理解された。1つは、子育てに関与できなかったことに起因する母親へのなりきれなさ、であった。つまり、子がこれまでにどのように生きてきたのか、その知らなさを背景にもった子の人生への介入のできなさの経験である。2つは、そのような経験を伴いながらも、子が生き

ていることを願う者であることによって、自らを母親として認識し続けていること、さらに子の存在は、ひるがえって親の存在そのものを支えていることが理解された。3つは、親の人生は、子の人生に自ずと連動しながら経験されている、ということだった。すなわち、親子の関係に組み込まれた時点で、親もその関係から切り離されず、子の人生に連動しながら自らの人生を生きていること、いわば「子の選択不可能性を共に生きる者としての親のあり方」が理解された。

以上をまとめると、課題2として親子の繋がりを問い直した結果、親子としての繋がりを前提にすることが困難な親子関係では、離れ続けるという関係のあり方を必要としながらも、親子という関係に組み込まれていることは変わらずに経験され続けていること、その意味で、親子は子育てのような具体的なケアの次元だけで説明される繋がりではないことが指摘された。

第9章では、第7・8章で得た示唆をふまえて、「対の関係」は、存在の「はじまりの地点」を共有する繋がりであること、したがって互いが互いの存在の理由や意味となり、それゆえに切り離すこと、あるいは否定することができない、いわば「存在的次元」で経験される繋がりであることが理解された。以上により、親子関係を単に選択不可能な関係として見るだけではなく、それと同時に代替不可能な関係として見る必要性が指摘された。

第10章では、3つめの課題である世代的繋がりへの問い直しを試みた。そのために、第5章および、第7・8章では2世代間での関係に留めて分析した語りを、3世代間の関係における経験として検討の射程を広げ、改めて分析した。具体的には、2つの親子関係において子と親の2つの立場をもつ者の経験に焦点をあて、複数世代の重なりの中で経験される「対の関係」の理解を試みた。その結果、2つのことが理解された。1つは、世代的繋がりを生きる経験は、従来の先行研究が提示してきたような、子から親へ、親から祖父母へという直線的な立場の移行の経験、すなわち「直線的な自己の変容過程」というよりも、親になりながらも子であり続け、子になり直し続ける、というような、複数の「対の関係」と立場の重なりを、重なったままに同時に生きる経験、すなわち「重層的な自己の変容過程」であることが理解された。2つは、世代的繋がりを生きることは、存在の確かさに関わる経験ということである。すなわち、従来の先行研究で提示されてきたような、関心や資源が次世代へと伝達される、前進的な経験に留まるものではなく、世代的繋がりによって次世代が新たに連なったとき、ひるがえって次世代を生み出した者の存在がその繋がりの中で確かにされ、関係の中に根付き直していく、いわば「垂直的な自己の根付きの経験」であることが理解された。

最章では、以上の3つの課題の検討から得られた示唆に基づいて、本研究の問い、すなわち、関係の中に生きる者にとっての自立の意味とはなにか、に対する結論を述べた。まず、関係の中に生きる者としてのあり方として、本研究から提起されたのは、単に前に進むこと、変化することのなかだけで経験されるのではなく、前に進みつつも自らの「はじまりの地点」に絶えず立ち戻り続ける中でも経験される、ということだった。表現を変えると、関係の中に生きる者である限り、人は自らの人生を前に進めば進むほど、自らの「はじまりの地点」

を問わざるをえない存在である，ということである。

したがって，関係の観点から再考される自立の意味に対する本研究の結論は，自立の最終的な到達点は，自立そのものの達成，すなわち個体としての成熟ではなく，自立を目指す過程で，「自立できない者，関係から切り離されない者」であることと向き合うために経験される，ということだった。言い換えると，自立の経験，さらに言えば自立という発達課題は，「関係から切り離されない者」という人としてのあり方と向き合いながら，その上で「関係の中でどのように生きるか」を模索するために経験される，これが本研究の検討の結果として得られた結論である。